

印刷物の幅広い普及を目指し 新たなビジネスモデルで大躍進

プリントパック

本社 京都府向日市
設立 1970年
売上高 328億円(2019年4月期)
従業員数 1034人
銀行取引店 三菱UFJ銀行京都駅前支店

デジタル化はあらゆる業界に激震を引き起こしている。市場が縮小したり、意外な競争が現れたりして、従来のやり方が通じない、と悩む企業は少なくない。そんななか、インターネットの隆盛で市場が縮小傾向にある印刷業界において、新たなビジネスモデルで大躍進を続けているのがプリントパックだ。

もともと印刷は、版下をつくる製版から印刷、製本など複数の専門会社の分業で成り立っている。プリントパックは、その製版を担う会社として1970年に創業した。後発組ながら技術力が認められ、京都では大手の一角を占めるまでに成長したが、90年代以降は印刷不況で業績が悪化。そして、原稿制作からレイアウトまですべてをPC上で実現するDTP(Desktop Publishing)ソフトの登場でさらなる苦境に立たされる。92年ごろ、当時社長だった木村進氏(現在の会長)が、得意先を訪問すると女性事務員がPCの前で何か作業をしていた。聞くと、名刺デザインの練習をしていると



木村進治社長

いう。木村氏は「素人でもプロの仕事ができる時代が来た。製版業はなくなる」と衝撃を受けた。

過去の経験を生かした最後の挑戦が実を結ぶ

「何か手を打たなければ先細りする一方だと、新事業を探し始めました。まず考えたのは印刷のエンドユーザーとの関係づくり。大阪へ足を延ばし、飛び込み営業を始めました」。こう回想するのは、いまは経営トップとして采配を振るう木村進治社長である。

印刷物を売り込むうちに、一般的になりつつあったホームページの制作も請け負うようになる。関連してプロバイダ分野にも進出。だが、どれも次代を担う事業には育たなかった。

用者は急速に増加、現在、登録者数は125万人に達するという。

誰もが印刷を気軽に利用できる世の中に

プリントパックは、安さにこだわる。そこには強い思いがある。創業から数年がたったころのこと。仕事は順調に増え、新卒者の採用を始めようと、木村進氏が近くの高校を訪ねた。学生を紹介するには、仕事の中身がわかる会社案内が必要だと言われた。

仕事のつてを頼り、会社案内をつくるための見積もりを出してもらうと、約200万円。当時の年間経常利益とほぼ同額だった。「印刷は価値あるもの。しかし、

そんなに高くは、潤沢な資金を持つ一部の企業しか利用できません。個人には到底無理。いつか誰もが印刷を気軽に利用できる世の中にする、と会長は決意したそうです。以来、当社は「印刷物をより多くの人の手に」を社是に掲げています(木村社長)

そうした思いから、多くの印刷業者が敬遠する小ロットの仕事も受け、複数の印刷物のデータを一枚の紙に組み合わせる「付け合わせ」という手法を駆使。また一貫生産体制で個人にも利用できる低価格と、量産化を実現した。

たとえば、フルカラーの名刺は100部で399円、A4サイズフルカラーのチラシは100部で



2019年8月から開始した「DMまるごとパック」のトップページ。ダイレクトメールの印刷・宛先印字・配達代行まですべてを一手で引き受ける

580円。いずれも送料は無料という驚きの低価格だ。しかも同社は、満足できなければ返金に応じる「100%満足保証」をつけるなど、高品質を約束している。最近では、ダイレクトメールの印刷から配達代行までを一括で引き受ける「DMまるごとパック」の提供も開始した。

「よく積極経営に見られがちですが、会社が生死の境をさまよう瀬戸際を経験したからこそ、『命を守り』ための経営をしてきたと思っ

一方で、製版だけでは今後難しいと考え、2001年には印刷、加工といった全工程を手がける一貫生産体制を整備。大きな投資だったが、結果は芳しくなかった。事業資金は残りわずか、万策尽きたかと思われた。「ついにこれまでか」というときに出会ったのが、インターネット印刷通販でした」と木村社長は明かす。

インターネット上で全国から注文を受け、レイアウトを完成させ、印刷して発送するという事業だ。過去の関連事業の経験を生かし、半年をかけて準備。02年9月にサービスを開始したが、2カ月半たっても反応はなかった。

そんなある日、当時営業部長として大阪で飛び込み営業を続けていた木村社長のPHSが鳴る。会社からの電話だった。「注文が入りました。ポスター100枚です」。「大阪の雑踏の中で、思わず大声を出し、ガッツポーズをしていました。周りからは怪訝に思われていたでしょうね」と木村社長は当時を振り返る。その後、価格、使い勝手の良さが受けて、利



本社内にある工場では多くの若い社員が働く。大判の原紙に判型やデザインの異なるさまざまな印刷物が混在するため複雑になりがちな断裁も、熟練の技で素早く行う(左)。最終工程で行われるプロの目による確認が品質保持には欠かせない(下)



2017年秋に稼働開始した関東千葉工場(上)。2019年9月には同じく千葉の木更津に過去最大規模の工場が稼働開始。日本全国からの顧客の注文を圧倒的な設備力で対応している(下)